

タマネギの栽培法

2011/10/14

注)文中の時期はあくまで佐世保地域のものです。地域によって前後にずれますのでご了承ください。

特性

玉葱(タマネギ)はグリンプラントというバーナリ型に属するので、越冬の際大きすぎる苗はトウ立ちが多くなりあまり早蒔きできない。一方、小さすぎる苗は肥大が遅くなるので、あまり遅まきもできない。このような上限と下限の制約と品種の個性によって、播種期を合理的に決定することが玉葱作りの最初の関門である。九州の当地佐世保では、超極早生系で9月10～15日、中～晩生系で9月25日～9月下旬が最適期である。暖冬が予想される時や、初期成育の旺盛な品種を用いる時はやや遅めとする。発芽後約50日で株元の太さが5～6mm、葉長25～30cm位、重さ4～5g位が定植に適する苗の大きさである。

大きすぎる苗は葉先を20～25cmに切りそろえるとトウ立ちの危険が低くなる。

タネまき

ネギと同じように、1m巾の平床として種子はバラまき、または

条まき(条間5～7cm)をする。間引きするのはもったいないので、播種に時間をかけ、できるだけ均一になるようにすることが大切である。1cm/1粒、条間5cmで計算すると、種子20mlで約2500～3000粒なので約1m×1.5m、2dlで約1m×15mの苗床が必要である。軽く覆土(※注1)し、その上から灌水し乾燥防止のため敷ワラとモミガラを敷く。可能なら、カンレイシャなどで被覆し、たたき雨による倒伏を防ぐ。(※注1)薄く覆土すると幼苗は倒伏しやすいので1cm程度の土入れが必要となる。そこで、塩分を抜いた砂などの(硬く固まらない)用土を、やや厚めに覆土する方法をお勧めする。

植えつけ

水排けのよくない畑では高うねがよく、元肥として1m²あたり堆肥1.5Kg、化成配合肥料100g、苦土石灰150g、過リン酸石灰(又はヨウリン50g位)を施す。60～70cm巾のうねに2条、

または、140～150cm巾のうねに4条で株間10～12cmで植えつける。第一外葉の付け根より深く植えないように注意する。

追肥

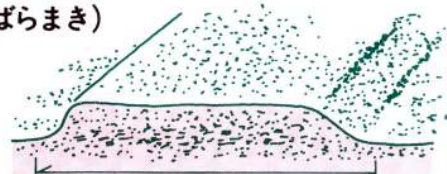
マルチ栽培では追肥はできないので、元肥に緩効性一発肥料などを用いる。普通栽培ではマルチ栽培と異なり、肥料の雨水による流出のため必ず追肥が必要となる。早生系で12～1月、中晩生系で2～3月上旬までに磷酸とカリを中心とした追肥を行う。遅れると、収穫適期になっても玉葱の休眠が始まらず、つり玉貯蔵しても腐りやすくなるので、この追肥のタイミングは非常に重要なポイントとなる。

収穫

九州では超極早生系で3月から青切り収穫が始まり、中晩生系のつり玉葱では5中/下～6月頃、葉が自然に倒伏した頃に収穫する。風通しのよい軒下などに吊って乾かして貯蔵する。

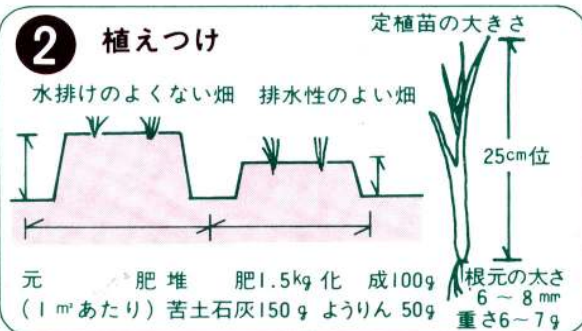
日本種苗協会長崎県支部/市川種苗店
※一部又は全部の引用を禁止いたします

1 タネまき (ばらまき)



種はまんべんなくばらまきし、種が見えなくなる程度に土をかける。その上に堆肥や腐葉土をふり、さらに発芽までわらや新聞紙を掛けておく。

2 植えつけ



3 収穫



全体の5～6割の茎葉が倒れたら、晴天の日に収穫する。